



柿沼 唯(作曲家)

モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791)は5曲のヴァイオリン協奏曲を残したが、最初の作品である<第1番>はモーツァルトが17歳の年(1773年)に、残りの4曲はいずれもモーツァルトが19歳の年(1775年)にザルツブルクで作曲した連作である。幼い頃からヴァイオリンに親しみ、父レオポルトの言によれば「その気になれば当代随一の名手になれる」ほどの腕前の持ち主だったモーツァルトが、これらの協奏曲を宮廷楽団での自身の演奏のために書いたことは容易に推測されるが、5曲の成立事情は明らかではない。いずれも華やかなヴァイオリンの技巧が十分に発揮され、明朗で社交的な性格をそなえた魅力的な作品となっている。そして連作を順を追って聴くと、モーツァルトが短期間のうちに、いかに多彩な影響を消化し個性的な傑作を生み出していったか、天才の足跡をたどることができる。

ヴァイオリン協奏曲第2番 二長調 K.211

<第2番>は、フランス風のスタイルで書かれた協奏曲で、<第3番>以降のスタイルの基礎がこの作品で築かれたと評されている。オーケストラの伴奏を単純化し、それに代わってヴァイオリンの音色的な美しさと官能性を際立たせるという、フランス好みのギャラント様式を反映した一曲となっている。

第1楽章アレグロ・モデラートは、強弱の対比を特徴とする主題に始まり、独奏ヴァイオリンとオーケストラの交替という単純な構成ながら、ヴァイオリンの軽やかな躍動感と表情が生かされる。

第2楽章アンダンテはとりわけフランス的な楽章で、そのメロディはオペラ・コミックを想わせる。

第3楽章ロンド、アレグロは、二つの副主題を配したロンド形式。ロンド主題は最初独奏ヴァイオリンで弱奏で示され、つづいてオーケストラが強奏で繰り返す。曲の後半にはミノレ(短調)のエピソードも挿まれる。

ヴァイオリン協奏曲第3番 ト長調 K.216

前作<第2番>の作曲から3ヶ月後の1775年9月に書かれたこの協奏曲には、前作をはるかに凌ぐ音楽的内容と、天才の創造の発露とも言うべき靈感が備わっており、しばしば5曲中もっとも高い評価を与えられる。第3楽章に当時の民謡「シュトラスブルガー」の旋律が用いられていることから、モーツァルト自身が「シュトラスブルグ協奏曲」の名で呼んでいたこの曲には、さらに第1楽章の第1主題に自身のオペラ「羊飼いの王様」(K.208)のアリアから旋律が引用され、歌心あふれる協奏曲の魅力が横溢する一曲となっている。



柿沼 唯(作曲家)

第1楽章アレグロは、快活優美な第1主題と、管楽器の響きを生かした第2主題が交響的な広がりを生む。

第2楽章アダージョでは、オーボエの代わりにフルートをを用いて、表情豊かな独奏ヴァイオリンの背景を艶やかに彩る。

第3楽章ロンド、アレグロは、ポプリ(接続曲)風のフランス趣味を楽しむフィナーレ。6/8拍子の愛らしいロンド主題に、2/2拍子ト短調のアンダンテと、ト長調アレグレットのエピソードが挿まれる。

ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 変ホ長調 K.364

協奏曲の申し子ともいえるモーツァルトは、ドラマティックで歌心にあふれる数々の協奏曲の傑作を残したが、<協奏交響曲>は、モーツァルトが書いた複数の独奏楽器のための協奏曲を代表する傑作。マンハイム・パリ旅行から帰郷後の1779年夏に作曲され、ヴァイオリンよりもむしろヴィオラの演奏を好んだというモーツァルト自らが、そのヴィオラ・パートを受け持って初演されたと考えられている。当時のパリではこの種の協奏交響曲が大流行しており、それに影響されてモーツァルトはこの時期、この曲のほかにも、<フルート、クラリネット、ホルン、ファゴットのための協奏交響曲>K.297bを手がけている。これらの作品には、シュターミッツに代表されるマンハイム楽派好みの主題や長大なクレッシェンドなど、マンハイム・パリ様式の影響が顕著に表れている。またこの<協奏交響曲>には、パリで母を亡くした影響といわれる音楽内容の深まりがみられ、特に第2楽章の赤裸々な悲しみの表現などは、後期作品を予見させるものとなっている。

モーツァルトはこの<協奏交響曲>のほかにもヴィオラが活躍する曲を、<ヴァイオリンとヴィオラの二重奏曲>K.423, K.424、<ケーゲルシュタット・トリオ>などいくつか手がけているが、その扱いは巧みである。この<協奏交響曲>では、ヴィオラの調弦を通常より半音高くすることにより、ヴァイオリンより響きの地味なヴィオラに対等の華やかさを発揮させる効果をねらっている。それと同時にヴィオラならではの深い味わいもよく生かされており、華やかさと陰影とが絶妙に配されているところに大きな魅力がある。

第1楽章アレグロ・マエストーソは、堂々たる協奏風ソナタ楽章。

第2楽章アンダンテは、深い内容をそなえる緩徐楽章。

第3楽章プレストは、舞曲風の軽やかな楽想が展開する。